

## 医学部図書館の未来

人間健康学部スポーツ医科学科 副島 崇

図書館に行かなくなって、というより、紙媒体の学術論文を利用しなくなって随分久しい。読みたい論文があれば、3割が無料、7割は有料だが、わずか数千円でもものの数十秒でインターネットで手に入る。定期購読の雑誌もすべてオンライン版のみの契約にしている。今や、手術のスキル向上にオンライン動画は不可欠である。重くて高価な成書を海外学会のついでにトランクに詰め込んで持ち帰ったり、高名な外科医の手術ビデオを頼み込んでダビングして送ってもらったりした頃とは隔世の感がある。

さて、そんな便利な現代において、図書館の存在意義とは何であろうか？

情報収集の場としての役割はもはや求められてはいないだろう。多くの人が足を運ぶことなく、自宅や研究室から直接情報にアクセスしているに違いない。しかし、わずか数千円とはいえ、有料コンテンツを個人で購入するのはけっこう辛い。そこで、図書館が電子ジャーナルと契約を結び、学内の我々がそれを利用している。そう、情報インフラのハブとしての役割、電子図書館である。その運用経費は生半可なものではないと伝え聞くが、大学の研究者にどれほどの恩恵をあたえていることだろうか。

しかし、いずれ近い将来、オープンジャーナル化の波に飲み込まれ、電子図書館としての存在価値も失われてしまうのだろうか。

なにも情報に関わることだけが図書館の役割ではない。純粹で若かりし頃に読み込んだ、何の脈絡もない様々な分野の、それでいて一生忘れることのない読書体験の記憶は、常に、図書館の凜とした空気と匂うような静寂さとともにある。医学図書館といえども、書物を五感で体感する空間として役割がある。また、古い書物（医学書）を歴史的遺物として後世に伝える博物館的な役割も重要であろう。そう考えていくと、老朽化した今の旭町図書館にもその残された役割を果たすことを期待したい。